

B: 英彦山祭(10月15日の祭り)について

英彦山は、古来から神の山として信仰されていた霊山で、英彦山から放射状に流れでる河川は豊前(ぶぜん・福岡東部と大分北部)、豊後(ぶんご・大分)、筑前(ちくぜん・福岡北部と西部)、筑後(ちくご・福岡南部)、そして肥前(ひぜん・佐賀)の五国の田畑を潤しています。英彦山を仰ぎ見ると民人にとっては神霊のこもる山として水分神の信仰を得ていました。御祭神が天照大神(あまてらすおおみかみ)の御子、天忍穗耳命(あまのおしほみのみこと)であることから「日【神】の子の山」「日子乃山」、即ち「日子山(ひこさん)」と呼ばれていました。嵯峨天皇(さがてんのう)の弘仁10年(西暦819年)、詔(しよ・天皇の命令)により「日子」の2字を「彦」に改め、次いで、霊元法皇の享保14年(西暦1729年)には、院宣(いんぜん・法皇の命令)により、この山が偉大な存在であることを称えて、「英」の一字を賜り「英彦山(ヒコサンと読む)」と改称され現在に至っています。英彦山は、中世以降、神の信仰に仏教が習合され、修験道の道場【英彦山権現様】として栄えましたが、明治維新の神仏分離令により英彦山神社となり、昭和50年(西暦1975年)に「神宮」に改称され、【英彦山神宮】になりました。英彦山信仰は、自然の立地条件の恵みにも支えられ、農工業の守護神として人々から崇敬(すうけい)されています。

佐賀平野というのは北の山の連なりで恵みを受けています。東は九千部(くせんぶ)山、背振(せぶり)山麓、天山(てんざん)があって、そこから大小の河川が南麓(なんろく)に流れています。すなわち、北部のこの山々が水分(みくま)【分水嶺・ぶんすいれい】となって山麓から佐賀平野を潤していたのは、太古以来のことです。したがってこの山々には神霊(しんれい)があることを信じて、この山の信仰の頂点に英彦山神社を、そして各山麓には神殿・祠(ほこら)などを建立し、水の恵みと五穀豊穰を祈願してきました。

英彦山は鍋島藩のあつい信仰とあいまって、村の安全と豊かな暮らしを願って佐賀の人々の参詣(さんけい)が絶えなかったと伝えられています。肥前(佐賀)からの英彦山参詣に対しては、鍋島家が大胆那であったこともあり、二の膳付で優遇されたと伝わっています。英彦山の祭りである3月15日の御田祭(おんださい)に合わせての参詣(さんけい)が多かったようです。肥前(佐賀)の地区における英彦山祭りがなぜ10月15日に多いのか、あまり伝わっていないので、良く分かりません。実りの秋の稲刈り等の農繁期が終わっての日程で、この日の近くに祭りが行なわれていると思われれます。その時期に、村の人達の祭り(講)として、水の恵みの英彦山に対して五穀豊穰をお祝いする祭りが、英彦山権現講祭りです。

英彦山の山岳仏教聖地の面影を残しているところとして、東から九千部山には大山祇(おおやまつみ)神社と万歳寺(ばんざいじ)があり、背振山麓には霊仙(りょうせん)寺や修学(しゅうがく)院があります。また、土器(どき)山(神埼町)・背振神社(背振村)の西には金立(きんりゅう)神社(佐賀市)、さらに河上(かわかみ)神社【大和(やまと)町・祭神の名で与止日女(よどひめ)神社ともいう】と実相院(じっそう)が続きます。佐賀市と佐賀平野に貴重な水をもたらすのがこれらの霊地だと考えられてきました。その西に連なる天山神社(小城町)、岩蔵(いわくら)天山神社・晴気(はるけ)天山神社・巖木(きゅうらぎ)町広瀬の天山神社の3社があります。これなどは山上の上宮(じょうぐう)かみのみや、神社のうちで最も上方または奥に所在する神社)の恵みを山麓に招請(しょうせい)・招き入れることした山岳信仰の典型を残しています。以上のほかに、山の神などの俗信(ぞくしん)・信仰は、各山間に祠(ほこら)を残していますので、佐賀平野北部、ことに山麓生活が水ばかりでなく、薪炭・木材・野菜・果実など、山の恩恵の中で暮らしが成り立っていることを、人々は実感していました。この山の信仰の頂点に立つものとして、距離としては遠くでも英彦山信仰が確立したとみるべきでしょう。このような背景から、佐賀藩主鍋島家が英彦山へのあつい信仰を示したことは、領内を治めるのための重要な政治的手段になっていました。鍋島藩が英彦山信仰に手厚い政策を示したのは、初代鍋島勝茂(かつしげ)からです。英彦山参道正面に立つ銅の鳥居(重要文化財)は、寛永14年(西暦1637年)に勝茂が奉納(ほうのう)したものです。この銅の鳥居は吉野金峰山(よしのきんぶせん)寺の銅の鳥居と並び称される堂々としたもので、高さ7mのどっしりとした威容は、今でも英彦山を代表する建造物になっています。建造者もはっきりしていて、佐賀の谷口弥左衛門(たにぐちやざえもん)の施工と明記されています。谷口一門は幕末には鍋島藩の大砲製造を支えた鋳物師であり、のちまで谷口鉄工所として鋳造技術を維持したことで知られています。この鳥居正面の「英彦山」とある額は、寄進造立のちに霊元(れいげん)天皇から享保(きやうほう)19年(西暦1734年)に下賜(かし)・天皇など身分の高い人が身分の低い人に物を与えることされた御宸筆(ごしんびつ)・天皇の真実の筆跡)として有名です。それまでは彦山であったものを、霊元天皇がこの山を尊崇(そんすう)・尊びあがめる事)すべきこと、偉大な存在であることを称えて「英」を冠(かぶ)らせたことに始まって、英彦山と書いたあとヒコサンと読む習わしになっています。銅の鳥居から奉幣殿(ほうへいでん)まではなだらかな上り道です。この左右に数多くの坊や坊址が並んでいます。この道の中程に鍋島家の増上坊(ぞうりょうぼう)があります。大構えに格式を伺うことができますが、今では茅草(かやぶき)のこの宿坊も無住になっています。奉幣殿はこの参道の行き着くところにあります。境内の右半分は広場で、左に広大な社殿があって、ここはたしかに格式を保っています。この奉幣殿はもとは豊前小倉(ぶぜんこくら)にあった細川家の寄進によるものといわれ、修築の機会に肥前の佐賀方面に向けて建てられたことになっています。これも英彦山信仰と佐賀平野、さらに鍋島家を大胆那とする由来を強調するものとして見逃せません。奉幣殿の広場から上宮に向かう参道口に大きな石の鳥居がありますが、これは寛文2年(西暦1662年)に鍋島光茂の寄進となっています。ここから上宮までは生易しい参道ではありません。山頂は三つの峰からなっていて、それぞれに中岳、北岳、南岳と呼ばれています。もともとこの上宮が英彦山の神霊がこもる聖地とされてきました。当然のことながら烈風雨雪のきびしいことから、現在は石造りの宝殿になっていますが、この宝殿は安政4年(西暦1857年)に鍋島直正(閑叟・かんそう)が改修寄進したものです。英彦山信仰と佐賀、およびその領主鍋島家とのかかわりが、驚くほど深いことがわかる事実です。

英彦山に佐賀の農村から3泊(往路で1泊、英彦山で1泊、復路で1泊)4日でお参りにいく習慣が古くからありました。2日目に英彦山の宿坊(参詣にきた人が宿泊するところ)に着きます。宿坊に着いた村の衆は下にも置かぬ接待を受け、入浴を済ますと晩餐(ばんさん)になりますが、これがいわゆる「肥前の旦那は二の膳付き」の大盤振る舞いであったと云われています。谷川の小魚や豆腐のほかは山菜料理ですが、心のこもった料理に上澄み酒(清酒)は格別のものでした。佐賀の村の衆にとっては、日ごろめったに口にしないご馳走に、酒に慣れた者も、あまり慣れない者も、酔いつぶれて困憊裏端に寝込むのが普通だったといわれています。これは旧藩時代の米の産地の旦那(信徒)に対する英彦山山門の精一杯のサービスだったと言われています。それだけ豊かな米の産地の佐賀藩領は、英彦山に対しての感謝の念が強かったのか、供物の気前が良かったのか、良く分かりませんが、英彦山の懐具合を左右するほどの存在であったことは間違いありません。

英彦山詣りのお土産に欠かすことのできないものに、「ひこさんガラガラ」があります。いつのころからのものなのかは良く分かりません。ひこさんガラガラは素焼きの土鈴で振ってみると、かすかに鈴の音を出します。それに稲藁(いねわら)を通して握りにして数個を束ねているので、素朴で可愛らしさを伝えています。かさばるものでなく重いものでもないで、村内や親類への手軽なお土産には格好なものです。この「ひこさんガラガラ」は、昔から魔除けとして家の門口に吊るしておく習慣がありました。これは山伏の持つ錫杖(しゃくじょう)の鈴、または祈禱するときの振鈴の音を模倣したものと考えられます。このガラガラは、もとは地元で作られたものではなく、じつは今の佐賀県三養基郡中原町の寒水(しょうず)で作られて、英彦山に納入されていました。英彦山で納入されたガラガラを、一括お祓いして、魔除けとして奉幣殿の下の出店で売られていました。土産まで肥前国(佐賀県)とかかわっていました。

最後に
英彦山祭の掛軸について
【官幣英彦山神社】(かんべいひこさんじんじや)と書かれています。
【官幣神社】とは、主として皇室尊崇(こうしつそんすう)の神社、および天皇・皇親・功臣をまつる神社のこと。
「神祇官(じんぎかん)より、一定の格式のある神社に幣帛(へいはく)を捧げて祀った神社のこと。」
【神祇官(じんぎかん)】: 律令制で、天神地祇の祭祀(さいし)を執行し、諸国の官社を総管する官庁。太政官と同格。
【幣帛(へいはく)】: 神前に供える進物。